

今週のみことば

「愛する息子を送ろう」
(哀歌 1 章 1 節～1 4 節)
「私の背きの罪のくびきは重く、主の御手で、私の首に結びつけられた。主は、私の力をくじき（衰えさせられた）、私を、彼ら（立ちむかい得ざる者）の手にゆだね（渡され）、もう立ち上がれないようにされた。」(1:14)
(ルカの福音書 20 章 9 節～2 6 節)
「ぶどう園の主人は言った。『どうしたものか。よし、愛する息子を送ろう。彼らも、この子はたぶん敬ってくれるだろう。』」(20:13)

今日のメッセージ要旨

◎私たちにとって最も辛いことの一つに愛する者との死別であることを覚えませう。神様はご自分の一人子をこの地上に遣わされたのです。その行く末は？

◎LLX訳（ギリシヤ語の70人訳）の哀歌の序文には「イスラエルが捕囚となり、エルサレムが荒廃して後、エレミヤは座して泣き、エルサレムのために哀歌を歌って言った」とあります。1 章では、かつて栄え、女王の如く君臨していたエルサレムが、今や荒廃し、見捨てられてしまったことを嘆き、神の民は捕らえ移され、神殿は汚され、敵はあざ笑い勝ち誇っている。これらすべては、エルサレムの罪に対する神様の怒りと裁きがもたらしたものであると、告白しているのです。

著者の心にあったのは、美しく、多くの人々が巡礼に上った都。ダビデが基を据え、ソロモンが壮麗な神殿を建て平和と繁栄を極めた都。しかしバビロンの軍隊に町はおろか、主の御住まいにまで踏み込まれ、焼き払われた(10-11)。著者は民と連帯し、「私」の罪の結果として告白している(12)。バビロンによって破壊しつくされた町は、やがてローマによって同じようにされる。主イエスがエルサレムを思い、涙を流されたのです(ルカ19:41-44)。

◎ルカの福音書20章の主題は「宮におけるイエスの教え」です。イエスの権威についてのサンヘドリンとの問答（1-8）、悪い農夫のたとえ(9-19)、税金問答(20-28)、等です。特に農夫のたとえの所を考えたいと思います。

9節-19節は、イエス様が語られた邪悪な農夫たちのたとえの内容です。強情なユダヤ教の指導者たちに、神様のイスラエルに対する取り扱いを示しながら、暗に彼らの罪を指摘しているのです。ぶどう園はイスラエルを示しています。そこに遣わされたしもべたちは、旧約の預言者たちとバプテスマのヨハネを表わし、愛する息子はイエス様を示しているのです。ユダヤ人は、旧約の預言者たちに耳を傾けず、かえって心を頑なにして神様に背き、預言者たちを迫害したのです。そこで神様は愛する息子(イエス様)を遣わされたのですが、彼らはそれを殺してしまったのです。最後の手段として敬ってくれることを期待して神様が遣わされた息子をさえ拒み、殺してしまう強情な人間の姿を見せつけられます。

かつて神様が、アブラハムに愛する息子イサクを燔祭として献げるように命じられた時、アブラハムは朝早くイサクを献げるため、必要な物をイサクに背負わせて示された山に出かけるのです。途中でイサクとの問答がありますが、その場所に來た時、アブラハムはイサクを燔祭として献げ殺そうとした時、神様が止められ、代わりに羊を屠ったことでした。その時、神様が次のように語られたのです。「あなたの手を、その子に下してはならない。その子に何もしてはならない。今、わたしは、あなたが神を恐れることがよくわかった。あなたは、自分の子、自分のひとり子さえ惜しまないでわたしにささげた。」(創世記22:12)。